氏　　名　小西正人（こにしまさと）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第250号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目　具体的発話への動詞の寄与
——特にアスペクト的意味について——

論文調査委員　（主査）教授 田窪行則　教授 庄垣内正弘　教授 吉田和彦

論文内容の要旨

我々がもつことのできる知識や時間は有限であるのに対し，文は理論上無限である。理論的に無限に生成される「表現」のすべてが何らかの「意味」をもつのであれば，どのような形であれ，文の「意味」もまた無限に生成できるようなシステムの存在を認めなければならない。そこで重要になるのが「全体の意味は，統語的合成に対応して，それを構成する部分表現の意味と統語規則（文の構造）によって決定される」という Frege 以来の構成性の原理である。然し，「温度が上がる」という文は，ひとつの文でおおよそ「温度の漸次上昇（少しずつ上がる）」，「移行的状態変化（一定時間後に上がる）」，「状態変化結果の持続（一定期間上がる）」という3つの異なる意味をあらわすことができる。「ひとつの文で複数の意味をあらわすことができる」という場合，構成性の原理に従ってこの多義を部分表現の意味もしくは統語規則で説明する必要がある。また，「どんどん人が来る」という文は，複数の人が来るということをあらわしているが，構成要素のどの部分にも「複数」という概念は含まれていない。この現象もまた，構成性の原理に従った解決が必要である。

本論文では，従来の研究では動詞意味の一部であると考えられてきたアスペクト的意味について，先行研究の不備を指摘するとともに，具体例による記述研究を通して，文のあらわすアスペクト的意味は，語彙項目としての動詞と直接関係をもつ必要はないこと，そしてアスペクト的意味は動詞意味の一部ではないと考えるほうが，より統一的な記述が可能であることを主張する。更に，その分析を基に，動詞の，文あるいは具体的発話に対する寄与について考察を行っている。

第1章では，文および構成要素の意味解釈原理である「構成性の原理」を厳密に適用すると，文のあらわすアスペクト的意味を動詞のみに還元することは難しいということを述べる。そして，無限の発話理解に不可欠である構成性の原理を遵守すると，文のあらわすアスペクト的意味，語彙項目としての動詞が固有にもつ意味，そして両者の関係について，どのように考えればより統一的な説明が可能であるか，という本論文の目的を述べる。また，Comrie（1976），Smith（1997）という，アスペクト的意味についての二つの代表的研究を比較することにより，本論文で考察の対象とする「アスペクト的意味」について，本論文での目的に添って「事象や状態が時間軸上に定位されるときの意味をテンス的意味，事象や状態自身の時間的な構造についての意味をアスペクト的意味とし，後者を本論文の分析対象とする」と定義する。

第2章ではアスペクト的意味に関する先行研究をとりあげ，批判を加える。はじめにとりあげた金田一（1950）は，おもに補助動詞「テイル」との共起関係および意味にしたがい日本語の動詞を四種類に分類する試みである。ここで金田一（1950）は，「テイル」形をもたない状態動詞，「テイル」形で継続的意味をあらわす「継続動詞」，「テイル」形で結果状態の残存をあらわす「瞬間動詞」，そして常に「テイル」形であらわれる「第四種の動詞」という分類を行っている。然し，この金田一の研究は，分類基準が曖昧なこと，そしてそれぞれの動詞がアスペクト的多義を示す場合の分類が恣意的であったことなど，多くの問題を含んでいる。同じ2．1．でとりあげた仁田（1989）は，「動詞のもつアスペクト的意味は基本的にはひとつで，異なったアスペクト的意味であらわれることがあるのは，それぞれの文における他の共起表現などの外からの要因により，動詞自身が本来もつアスペクト的意味が変更を受けるからである」という，本来的・基本的アスペクト的

意味から派生的アスペクト的意味への転義，もしくは意味の変容・派生という操作により，アスペクト的多義の問題の解決を試みている。然し，やはり分類基準が不明瞭であったり，派生に関する条件が不明確であったり，また仁田（1989）自身が分類した動詞が実際の例では異なるふるまいを示すなど，こちらも多くの問題を含んでいる。2．2．ではより最近の研究や海外の研究をとりあげるが，やはり同じ問題を含んでいる。

また，2．3．でとりあげたIgarashi and Gunji（1998）は，「原語彙」および「視点」という概念装置を導入し，「（服を）着る」などの一部の語彙に関してはアスペクト的多義を説明することができたが，「事象」と「動詞」との区別が曖昧になったままであるため，これまでの研究の不備を一気に解決することはできていない。

いずれの研究においても，基本となっていたのは「アスペクト的意味は，動詞が語彙項目として，すなわちレキシコンにおいて固有にもつ意味であり，その動詞を含む文はそれに基づいたアスペクト的意味をあらわさなければならない」という考えであり，従来のアスペクト的意味の研究は，このテーゼに基づいて動詞分類を行うことと同義であったといっても過言ではない。然し，アスペクト的意味を主題とする先行研究がこれまで抱えていた問題は，ひとえにこのテーゼに対する固執が原因である。そこで，第2章の最後に，「語彙項目としての動詞が固有にもつ意味からアスペクト的意味を切り離し，この二つは互いに密接に関係してはいるが，一方がもう一方に従属するものではない」という本論文での立場を示している。

次に，第3章では，文（発話）のあらわすアスペクト的意味について考察を行っている。ここでは，第2章で得た結論をもとに，以下のことが主張される。つまり，文のあらわすアスペクト的意味は，構成要素である動詞が固有の意味の一部としてアスペクト的意味をもっており，その意味が文に反映され実現する，という過程で形成されるのではなく，動詞が固有にもつ辞書的意味とは独立して，文或いは具体的発話があらわす「アスペクト的意味の構造」が存在し，その構造と構成要素との，或いは構造同士の関係により文のあらわすアスペクト的意味が生じるのである，ということである。

まず3．1．では，本論文での分析を示すために，Jackendoff（1996）の表記法を，多くの表示例を引用しながら導入する。Jackendoff（1996）の表記法を導入する意義は，この表記法を用いると，かなり抽象的なアスペクト的意味を具体的に表示できること，そして「事象内部の構造」を詳細に示すことができるという二点である。

3．2．では，現代日本語の状態変化動詞文があらわすアスペクト的意味を対象とする。第1章でも見たとおり，「温度が上がる」という文は，「漸次変化過程」，「移行」，「結果状態持続」という3つのアスペクト的意味をあらわすことができる。また，状態変化動詞文に限らず，修飾表現が状態変化をあらわす文（「赤く塗る」）や，「漸次変化過程」という意味の中に「移行」という意味が含まれる例（「どんどん来る」）も，状態変化動詞文と同じ基本構造で説明することができる。このことは，この3つのアスペクト的意味の基本構造は必ずしも動詞そのものと関係をもつ必要がないこと，したがって第2章まででみた「継続動詞」や「瞬間動詞」などの動詞分類もまた必要でなく，統一的な分析を行うには寧ろ語彙項目としての動詞が固有にもつ意味の一部としてアスペクト的意味を設定するべきではないということを示している。

続く3．3．では，事象修飾表現「どんどん」を含む文を対象とした考察を行う。「どんどん」文があらわす「進行」という意味はすべて「漸次変化過程」というアスペクト的意味であるが，より詳細にはおおよそ「程度の進行（「どんどん膨らむ」）」，「部分・範囲の進行（「どんどんはがれる」）」，「事象・対象の複数（「どんどん来る」）」という3つのアスペクト的意味をあらわすことができる。これらのアスペクト的意味の違いは，事象修飾表現「どんどん」が，状態変化事象のどの経路を修飾するか，或いはどの部分が経路として「どんどん」の修飾を受けるか，ということにより生じたものである。そして，それぞれのアスペクト的意味について，修飾の形や意味・共起表現の制限などを詳細に観察したところ，事象修飾表現「どんどん」が直接に関係をもっているのはアスペクト的意味解釈の型，或いは事象の型であり，語彙項目としての動詞それ自身ではないことがここでも明らかにされる。

3．4．ではアスペクト的意味と関係の深い「まで」句と期間修飾表現を対象として，それぞれの表現が事象に限界を付与するはたらきをもつこと，そしてそのはたらきはすべてアスペクト的意味の基本構造に対して行われるものであり，動詞そのものとは直接の関係をもつ必要はないことが述べられている。

更に3．5．では，現代日本語の動詞接尾辞「ぱなし」をとりあげる。はじめに3．5．1．では有題「ぱなしだ」文をとりあげ，「何らかの事象が起こった後そのままである状態」を記述するという「ぱなし」の語彙的意味が，上部事象，下部事象，そして事象全体のうち関わる事象によりそれぞれ異なってあらわれ，特に事象全体に関わる場合は「放置」という

新しいアスペクト的意味を獲得することをみている。そして3．5．2．では「ぱなしで」句をとりあげ，主節であらわされる事象の背景的意味を叙述する「ぱなしで」句（「鍵をかけっぱなしで出かける」）と，主節であらわされる事象に伴う付帯状況的意味を叙述する「ぱなしで」句（「ずっと歌いっぱなしで歩いた」）という二つのアスペクト的意味があることをみる。そして，この現象もやはり従来の「アスペクト的意味による動詞分類」によっては説明されえず，動詞とは独立して存在するアスペクト的意味の構造によって分析する必要があることを，いくつかの多義文の例によって検証している。3．5．3．では，それまでの分析をもとに，アスペクト的意味解釈において重要なのは文のあらわすアスペクト的意味の基本構造であり，動詞自体ではない，と結論し，アスペクト的意味に関しては，動詞はただ，アスペクト的意味構造を構成する意味を提供できるような語彙的意味をもっているかどうか，そしてその提供は実際どのように解釈されるか，という点において発話への寄与を行うのみである，ということを示唆している。

第3章までの主張は，「語彙項目としての動詞が固有にもつ意味」と「文或いは具体的発話があらわすアスペクト的意味の構造」を峻別すべきであること，そしてその峻別によりはじめて語彙項目としての動詞と，文のあらわすアスペクト的意味との関係を正しく記述することができる，ということである。第4章では，それまでの章で提示した考えをすすめるために，個別の動詞についての具体的な分析を行っている。

はじめに，変化をあらわす動詞について，これらの動詞が語彙項目として固有にもつ「意味」，および文のアスペクト的意味を確定するプロセスについて考察する。4．1．1．では，状態変化自動詞「膨らむ」が固有にもつ意味としては，状態をあらわす「膨」という意味を設定すれば充分であること，そしてこの意味こそが他の「萎む」などの動詞と対立する部分であることを述べる。次に4．1．2－3．では，4．1．1．で設定した動詞固有の意味が文のアスペクト的意味に関係する様子を，共起表現（4．1．2.），文脈（4．1．3.）という二つの観点からみる。4．1．4．では，特定のアスペクト的意味をあらわすことのできない動詞について，それぞれの制限の詳細な観察を通して，それぞれの動詞が語彙項目としてもつ意味の記述を行う。そして，動詞はそれぞれの固有の意味として特徴的である部分を実現しながら文の意味に寄与する，ということを主張する。

続く4．2．では，本論文で殆ど考察の対象とならなかった，動作をあらわす動詞について，若干の考察を行う。4．2．1．では移動様態動詞「走る」を対象として，そして4．2．2．では維持行為について，簡単にふれられている。

最後の第5章では，本論文で主張してきたことをまとめるとともに，今後の方向性について述べられている。

最終的な結論として，本論文が主張するのは以下のことである。現代日本語において語彙項目としての動詞が固有にもつ意味は，アスペクト的意味を含まず，関係をもつ他の語彙項目と純粋に対立し，共有する意味部分である。そしてその意味部分が，共起表現や文脈などと相互作用することにより，文あるいは具体的発話に制限を与え，文の領域であるアスペクト的意味を制限・決定するのである。動詞の寄与は，このような形で行われる。

以上，本論文では，従来の研究において動詞の意味の一部であるとされてきたアスペクト的意味について考察を行い，そのように考えると「アスペクト的多義」など多くの問題が生じ，統一的な説明ができないこと（第2章），語彙項目としての動詞とは直接関係なく記述できること（第3章）を指摘し，文のあらわすアスペクト的意味は，語彙項目としての動詞が固有にもつ意味の一部ではないと結論している。そして，動詞が固有にもつ意味と，文あるいは具体的発話への寄与について，新しい提案を行っている（第4章）。

論文審査の結果の要旨

本論文は，動詞の表す「アスペクト的意味」の「多義性」の問題に関して，統一的な解決を与えようとする試みである。金田一（1950）の画期的な論文以来，動詞は「ている」のようないわゆる「補助動詞」との共起により表れる「アスペクト的意味（事象や状態自身の時間的な構造についての意味）により分類されてきた。金田一をさまざまな形で批判修正してきた，藤井，井上，仁田，森山なども基本的には同じ手法をとる。本論文は従来の「アスペクト的意味」を動詞分類と同一視する方法が根本的に誤っており，失敗に終わらざるをえないことを指摘し，これに代替するアプローチを提案することを主たる目的とする。

論者は第2章において，金田一，藤井，仁田，森山などのこれまでの研究の問題点を詳細に検討する。この検討により，

金田一以来の方法の問題点は「アスペクト的意味は，動詞が語彙項目として，すなわちレキシコンにおいて固有にもつ意味であり，その動詞を含む文はそれにもとづいたアスペクト的意味を表さなければならない」とするテーゼを採用しているためである，という指摘を行なう。各動詞はその大多数が文における用法の解釈により複数のアスペクト的意味の解釈を受ける。したがって，このテーゼを採用する限り動詞に多義性を認めざるをえなくなるが，この多義性の説明に用いられる動詞の複数帰属や基本・派生の決定は基準が不明瞭で，恣意的であり，本質的に分類を維持するために行われている。論者は，各論文の観察と主張を仔細に検討し，このテーゼを維持する限り，現象の一般的記述は不可能であることを明らかにし，このテーゼ自体が根本的な欠陥を内蔵していることを示した。本章の考察はこれまでのアスペクト論の根本的問題点を指摘し，日本語アスペクト論を大きくすすめる論となりえている。

論者は，この欠陥を克服すべく，第3章において「文の表すアスペクト的意味の構造」なるものを想定し，これと，「語彙項目として動詞が固有に持つ意味」，「それと共起する構成要素の意味」との3者の関係によりアスペクト的意味が生じるという主張を提示する。論者はこの論の内容をより明示的に表すため Jackendoff（1996）の表記法を採用する。Jackendoff は，事象の時空間での存在のあり方を，「事象の断面」と「その時空間でとる連続的な存在様式（軸）」に分離して記述することで表し，それと言語表現との写像をとる表記法を開発している。この表記法を採用することにより，事象の内部構造に言及することができるようになった。Jackendoff の装置を日本語アスペクトの分析に本格的に採用したのは本論が最初である。Jackendoff の装置自体は，アスペクト事象の分析のために作られたのではなく，論者はこの表示装置を日本語に適用するために，さまざまな工夫を施し，全くオリジナルな現象観察に基づいた分析を施している。日本語内部のオリジナルな現象観察にこの理論を適用することにより，本論は Jackendoff 理論のすぐれた解説となると同時に，理論自体への寄与をしている。

3章後半では，この表示装置を使い，通常動作の進行を表すとされる副詞「どんどん」（「2時間，どんどん食べる」）は他にも程度の進行（「どんどん柿が赤くなる」），複数動作（「風船がどんどん増える」）などの解釈を許し，しかもこれらの解釈は動詞自体の語彙的意味に直接関係しないことを示す。論者は，このような副詞類や「ぱなし（「うちの主人はご飯の最中も頷きっぱなしだ。」「ずっと歌いっぱなしで歩いた。」）」のような動詞に着く接辞的要素の解釈とそれが表しえる事象の関連を詳細に観察し，動詞語彙項目に固有のアスペクト的意味を想定することではこれらの現象が記述できないことを説得的に示している。

従来のアプローチが動詞の個々の用法におけるアスペクト的変異を多義（ambiguity）と考えて，動詞固有の意味とするのに対し，論者はこれを不明確性（vagueness）ととらえて，動詞自体の意味はより抽象的なものとし，アスペクト的意味を発話，文の解釈により，構築的に構成する立場を取るものである。

このアプローチを取ることにより，動詞自体の意味をより正確にとりだすことを可能にし，アスペクト的意味自体がどのように機能するかを明らかにできる。4章では，このアプローチが具体的にどのような形を取りえるかをいくつかの事例に基づいて考察し，動詞固有の意味としてどのようなものを想定すれば，他の共起表現，「文の表すアスペクト的意味構造」との相関でアスペクト的意味が構築できるかが論じられている。

本論文は，これまでの日本語アスペクト論を批判的に検討し，あくまでも一般言語学的な立場から論じており，単に日本語アスペクト論にとどまらず，日本語を通じて広く言語理論に寄与している。現象観察は精密で非常に独創的であり，多くの事例は論者がはじめて体系的に論じたものである。本論文は，日本語アスペクト論を理論的にも実証的にも大きく前進させたものとして評価される。

欠陥としては次の点があげられる。いわゆる狭義のアスペクトは多くの言語で語彙的な区別があるのであり本論文の分析はそのまま適用できないことは明らかである。この点に関する考察が望まれる。また，文構造が明示的に示されていないため，文の統語構造とアスペクト的意味の相関に関する考察が欠けている。Jackendoff の表示にもとづくアスペクト的意味の表示に関しても，明示性に欠ける部分が散見される。以上のように，欠陥もあり，論の展開も荒削りであるが，骨太で，独創的な論証は，研究者として将来性を感じさせるものであり，博士（文学）の論文として十分水準に達している。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2003年3月10日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。